

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第507号 2024年6月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 感動から言葉は生まれる

二見 剛史

「孫の心を掘りあてたネおじいちゃん」これは持山でタケノコ掘りを楽しんだ六年生の孫から、翌々に届いた絵手紙の添え書きです。「感動は人生を開く」は鳩十先生のお言葉、小説家という前に国語学者と申し上げた方がよさそうな人。長野県出身ながら主たる活動の舞台は鹿児島でした。私たちの近くにも文学記念館があり、今も、親子読書運動が盛んです。加治木館の建設委員に指名されたのがきっかけで、文化や教育の基礎になる「文学」に私一家も興味を持ち、国語大好きな人生となりました。

九州大学での主任教授が国立教育研究所長へ異動されたのち私は「学制百年」を期して計画の歴史編さん事業に推挙を受け上京、東京生活約十五年の間に沢山の研究者とも交流できました。百年史全十巻のうち執筆を担当した領域は、高等教育―うち大学予備教育、産業教育―運輸通信教育です。当初は全国的資料調査にあけくれていました。在京中に大学史やアジア研究等もはじまり、また、教育学上の課題として生涯学習、環境教育問題、世界平和等のプロジェクトにも参加させてもらいました。

吉永先生との出会いはWEF（世界新教育学会）です。構成メンバーは、幼・小中高・大・の先生方さらに一般、国際教育会議や

外国視察の機会も多く、そして何よりも現場の先生方とご一緒の楽しい時間が今も続いております。

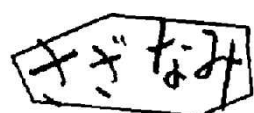
さざなみの皆様にもう一つ紹介させていたきたいこと、それは妻たちが楽しみながら学びあっている趣味、絵手紙交流文化活動です。Uターン（一九八〇年）後

開始した学習塾。九割が女性で多種多様な職業を持っています。絵と文を組合わせた絵手紙が毎日送られてきます。それを部屋一ぱいに並べ、論評しあいます。芸術と国語のドッキング。見学や小旅行等で描かれた作品は圧巻です。絵と文字（俳句程度）がぴったり合わさったときには会場から大拍手が起こります。冒頭に出した孫の絵手紙もその一つでした。

学習は楽しい方が良いと思えます。国語・文学・芸術作品の組み合わせが一致したとき、「ことば」の力が輝きはじめるような気がします。

これまで送られてきた会員の苦心談を静かに読ませていただきながら、国語学習のメリットを考えます。それはまさに「実物」に対する「感動」が絵や言葉となって表現される姿ではないだろうか、と。御盛會を祈ります。

（志學館大学名誉教授 鹿児島県文化協会顧問）



▼児童生徒の資質・能力の育成に向けて「ICTを最大限活用しこれまでに上回る個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（文部科学省）は繰り返し耳にしている▼「個別学習者の学び」とは一人一人の児童生徒に合わせた教育を意味し、学習者が自らの学習を調整しながら学ぶことができるように「個に応じた指導」を充実させることが必要であるとして各学校では授業の工夫及び研究が進んでいる。その背景にあるのが、GIGAスクール構想の下、ICTを活用した授業が日常化の傾向にある▼個別のニーズに応じた教材や学習環境を提供する授業は学習者の自立性を高め、多様な学習スタイルに対応することを目的としている。そのためには、一斉形態指導に加えて、個々の学習者の特性や学習進度に応じた指導に道を拓く視点が必要であるというのには当然のことである▼令和6年度から使用している教科書では、説明文、物語文教材それぞれ末尾には「見通して」のページを設けている。そこには、「問いをもと」と導き（光村図書の場合）具体的に「問い」を示しているその内容をわたしが学習したいことつなげる力と学習課題を作る

ことが個別最適の学びの前提になるのである。（吉永幸司）

**新教材で遊ぶ**  
**「おにぎり石の伝説」**  
 高木 富也

今年度から教科書が新しくなつた。東近江市では、東京書籍の教科書を採用している。「おにぎり石の伝説」(文学)である。この作品は、作家である戸森する氏が、教科書のために書き下ろした新しい作品である。もちろん参考となる先行実践は無いため、教材研究から丁寧に始めなければならなかった。そこで今回は、新教材を実践する中で大切にしたい「遊び」の感覚について述べていく。

①【教材研究】で遊ぶ

「おにぎり石の伝説」は、五年生の学級内で巻き起こった「おにぎり石ブーム」に翻弄される主人公に共感的に読むことができる作品である。初読段階では、教材の面白さや児童に付けた力が目に見えてこなかった。この感覚は自分だけなのだろうか？他の先生方はどう感じたのだろうか？と思い、教師仲間とZoom会議を用いて教材研究会を行った。すると、自分と同じ思いを確認できたり、一人では気づかない視点がどんどん見えてきたりして、五年生らしい面白い教材だと認識を改めることができた。交流を通して、物語中の「空所」に着目することで、人物の心情の変化、物語のしかけに気づくことができるようになった。改めて、一人ではなく仲間と多面的・多角的に意見を交わす重要性を感じた。

②【空所読み】で遊ぶ  
 本教材は、行間によって場面分けがされており、場面ごとの展開の一文に感情が描かれていない部分に注目し、空所読みを用いて指導することにした。描かれていない時間的な空所を想像することだ。四月の導入期ということもあり、自分の読みを他者と交流するよい経験となった。想像力を膨らませながら、物語の展開を捉えることができた。

③【同化】して遊ぶ

最も面白かったのは、児童たちが運動場からおにぎり石を探してきたことである。物語中の「見つけた人は、幸せになれるらしいよ。」の一文のように、四つ葉のクローバーもセットで見つけてくる姿が何とも愛おしい。そこから、本学級でもおにぎり石ブームが巻き起こり、教室の片隅におにぎり石コーナーが設置された。「なんで石なんか夢中になるのか」と思っていたけれど、主人公たちの気持ちがわかった。という感想があった。正に物語と同化した。遊びながら学んだ場面であった。これから三点を通して、遊ぶ感覚で新教材を楽しむことができた。(東近江市立能登川南小学校)



**一言の配慮**  
 弓削 裕之

本校スクールカウンセラーの友貴美子先生による「子どもの自己肯定感について」の研修があった。乳幼児期の自己評価は肯定的だが、小4から小6までに急激な自己肯定感の低下が見られるという。要因の一つとして、他者との比較により、理想の自分と現実の姿のギャップに落ち込むということがあった。

作家の五味太郎氏が、著書の中で「学校がたくさんの差をつくっている」といった意味のことを述べていた。テストで満点をとる子がいれば、赤点をとる子もいる。短距離走で一位になる子がいれば、最下位になる子もいる。整理整頓が上手な子がいれば、机の中におさまらない子もいる。毎日のようにほめられる子と、毎日のように叱られる子。友だちがたくさんいる子と、いつも一人である子。確かに学校は、子どもたちの間にいろいろな違いを生んでいる。

初めて一年生の学年主任を務めた年に、吉永先生から教えていただいたことがある。その時、自分は個別指導中心の関わり方をしていた。教科書を上手に持っていない子がいたら、その子のところへ行行って正しい持ち方を教える。音読で声が出ていない子がいたら、その子のところへ行行って読み方のコツを教える。上手な子がいれば、全体の前でほめる。その様子をこぼさず先生が、声をかけてくださった。

「苦勞しているね。」  
 国語の授業をしていた。教材は『くじらぐも』だった。子どもたちの音読が、生き生きとしていない。個別指導をすればするほど、子どもたちの集中力が切れていく。途中から、吉永先生が入ってくださった。

「天までとどけ、一、二、三。」  
 先生は大きな声で範読した。が、子どもたちの様子を見て、くるりと向きを変えた。そして、子どもたちに背を向けたまま、

「天までとどけ、一、二、三。」  
 と、もう一度大きな声を出した。先生の表情が見えない。子どもたちの目つきが変わった。

「先生は、どんな顔をしていたと思いますか。」  
 ぼつと、火がついたのが分かった。勢いよく手が挙がった。次に子どもたちが音読をすると、その顔はまさに、天まで届かせようとする表情をしていた。

「誰かをほめると、その隣の子は、自分はダメな子だと感じる。一年生は、一斉指導を中心にした方がいい。机の上の教科書が整っていない子がいたら、みんなで一斉に机の上をくちやくちやにして、もう一度みんなで一緒に整える。」

教師が全体の場でほめたり注意したりすることで、子ども間に違いが生まれる。ほめることも注意することも大切だが、その一言の配慮で、子どもたちが自分を好きでい続けられるかもしれない。学校が差を生む場になるかどうかは、教師の言葉にかかっている。(京都女子大学附属小学校)

ほたるのまつり  
好光幹雄

ほたるのまつり

ほたるの ひかる

ゆうひがしずんで しんとして  
すずしいかぜが ふきわたる  
わたしとかあさん てをつなぎ  
ちいさなかわの どてあるく  
とおくにぼつり ひかるてん  
ほたるのまつり あるかしら

ゆうひがしずんで しんとして  
すずしいかぜが ふきわたる  
わたしとかあさん てをつなぎ  
ちいさなかわの どてあるく  
ひかるてんてん ふえてきて  
どきどきして むねのなか

ゆうひがしずんで しんとして  
すずしいかぜが ふきわたる  
わたしとかあさん てをつなぎ  
ちいさなかわの どてあるく  
ほたるがいつぱい とんでいる  
ほたるがびかぴか ひかっている

わたしとかあさん てをつなぎ  
やつとみつけた おまつりは  
ほたるのまつり  
ほたるのまつり

わたしとかあさん てをつなぎ  
じかんをわすれ みつめるの  
ほたるのまつり  
ほたるのまつり



ありがとう

きくた よしお

ええ そんなことなん  
うん そんなことやねん

ええ こんなこともなん  
うん こんなことやねん

ええ あんなことも  
うん あんなことも

ええ たいせつなことやん  
うん たいせつなことやねん

ええ ほんとうなんやね  
うん ほんとうなんやねん

ええ わすれられへんの  
うん わすれられへんねん

ええ まだあるん  
うん まだまだ あるねん

ああ そうやったんや  
うん そうやったねん

ああ そういうことって  
うん  
ああ

きいてくれて ありがとう  
(作 好光幹雄)

十九年前、一年生がやつとひらがながを習い終えた頃に、子どもたちのためにひらがなで作った詩です。

(大津市立膳所小学校  
近江の子ども俳句教室実行委員  
長)

実感をもつ  
少徳 信

「こまを楽しむ」では、全校にこまの魅力を発信する「3-1こま大事典」を作ることとをゴールに学習を進めている。その学習の中で、子どもたちが言葉の実感を獲得している場面があったので紹介したい。

本文を読み終え、おすすめのこまの紹介カードを作る場面に入る前に、実際にこまを体験してみる機会をもつことにした。というのも子どもたちはこままでの学習で、問いと答え、「はじめ」「中」「おわり」の構造やそれぞれの役割などについて理解し、本文を読み進めてきた一方、今の姿ではこまの魅力に十分気付いていないかもしれないと思っただからである。紹介カードを書く以上、書き手が実感をもつて書いていることがどうしても必要だと考えたため、このような機会を設けることにした。以下は鳴りこまを体験していたグループの会話である。

C1…「なあなあこの鳴りこまってほんまに鳴ってる？」

C2…「鳴ってるで、ほらこんなふうにしたら(耳を近づけたら)聞こえるで」

C3…「ほんまや！でも、もっと大きい音かと思ってた」

C4…「まあ、それはたしかに」

C5…「教科書は『ポーツ』って書いてあったけど、どちらかというと『コーツ』やろ」

C6…「そんでさ、わたし思ったんやけどさ、鳴りこまって音も確かにいいんやけどさ、回し方めっちゃ面白くない？」

C7…「そう！それ！おれが保育園の時にしたのはひも巻いて投げてるやつやけど、これって回してから床に置くねんな。こんなこま他にあるん？」

C8…「回す瞬間、めっちゃ気持ちいいよな。びゅーんってなるし大きいからなんか『うわ、すごい！』ってなる」

C9…「回し方も絶対紹介したほうがいい」

この一連の会話から、子どもたちの頭の中に漠然とあった「鳴りこま」がはっきりと像を結んだことがうかがえる。自分たちの感じた魅力を、自分たちの言葉で表現することによって、言葉への自覚が高まるのだろう。実感や感覚を大切にしながら、言葉の学習を続けていきたい。

(彦根市立高宮小学校)

